

# 2018 Japan National Team Report ” コーチ ”



報告者氏名	鷲尾 礼弁(江の島ヨットクラブジュニア)
大会名	2018 Optimist European Championship
開催地	Scheveningen, The Netherlands
大会期間	June 23-30, 2018

- 帰国後1ヶ月以内に、JODA チームでまとめた上、海外派遣担当までメールにて送付して下さい
- JODA 理事会にて確認の後、ホームページに公開します
- 記入時の注意点
  1. このレポートは今後海外派遣レースに参加する選手、役員また日本のジュニアのための資料です
  2. なるべく客観的な立場から、詳細に記入して下さい
  3. 大会本部や運営、他国や他国選手また特定の個人を批判するような記述はしないで下さい
- 写真資料について
  1. このレポートを補足する資料として必要です(文中に貼り付けて下さい)
  2. 他国OP艇を接近して撮影する際には、必ず相手国の選手、コーチの了解をとって下さい

チャーター艇 メーカー	艇 Winner	ファイル N1	スパー Optimax Mk4		
----------------	-------------	------------	--------------------	--	--

気象について	大会期間中は晴天が続き、最高気温 20-25 度位だったが、朝晩は非常に寒く、乾燥した天候。海上も日本の初冬ぐらいの寒さで、日本選手、海外選手ともウェットスーツ、パッドジャケ着用していた。
海面(湖面)の特徴や風の傾向	<p>・風: レース海面は北西に開けた海岸線の沖合い。大会期間中は北にある高気圧からの傾度風が続き、海風となった。日中はこれにサーマルが効わり北東から北西まで風軸が変化した。振りはそれほど大きくなり、後述する潮流の影響がはるかに大きいレースとなった。風はコンスタントに吹いており、弱い時で8ノット、強い日で最大20ノット程度。連日約10~12ノット程度でレースが行われた。日中の気温が高く水温は比較的低いので風は軽めに感じた。</p> <p>・波: 低気圧が北海中になかったためか、うねりはほとんどなかったが、オンショア風が上がると風波が大きくなった。江の島中の南西風15ノットぐらいの時程度の波高と感じた。</p> <p>・潮流: 大会期間中が大潮回りだったこともあり、潮流が非常に早く、強い時は分速50m に達し、セーリングに大きな影響があった。ただし、潮流の方向は一定で且つ規則正しく転流するので情報さえきちんと得ることが重要であった。</p>
帆走指示書内容で特記事項	<p>・予選シリーズが3日間、1 日3~4レースとだけ決められており、最終的に何レースやるのかは公式掲示で知らされる方式。他は特になし。</p> <p>・スキッパーズミーティングがなく、すべてコーチミーティングで情報伝達が行われていた。</p>

コーチボートについて	・ベルギーチームとシェア。ボートは隣国ベルギーから持ち込まれた RIB。ベルギーのコーチは60歳台後半の男性コーチ。1984年ロス五輪フィン級代表選手。コミュニケーションは英語で問題なくでき、北海の潮流情報など有益な情報を得られた。ベルギーチームの持ち込みボートのため、操縦はベルギーコーチで主導権が持てない状況だったが、日本チームにもよく気を使ってくれ大きな問題はなかった。
------------	--

以下、日本チームより上位の選手、国について記入して下さい

選手の特徴、体格	男子優勝のイタリア人、女子優勝のアルゼンチン人とも身長体重ともそれほど大きくはなく(40-45kgぐらいか)、日本チームが体格負けしたということはなかった。ただし欧米人はやはり子どもであっても骨が太い印象で、もっと吹いたレガッタではスタミナ面で差がつかないかも知れない。
機装品について	機装品は特記事項なし。セールはワンセールとJセールの両方がやはり主流だったが、女子優勝のアルゼンチン選手はオリンピックセールのゴールドを使用。スパーはOptimaxのMk4が主流のようであった。
セッティング等	よくわからなかったが、順風下のレースであったせいか、メインセールにはシワを入れず綺麗に張った選手が多かった印象を持った。
海上での練習方法	計測日初日に1日だけあった海上練習には海上に行けなかったため詳細不明。レース日のスタート前の走り合わせはラビットスタートが理解できている必要あり。
セーリング技術	普通に走っている際は顕著な差を感じないが、スタート、特に潮が強いコンディション下のスタート技術は大きな差があり、潮流が激しくても第一線をトップスピードで切っていく選手がやはり前に出ている。
戦術、戦略など	なかなか経験できないほどの強い潮の中でのレースとなり、艇を止めるとあっという間に流され、またオーバーセールするような状況であった。この中でも、上位選手はタックによるスピードのロスを最小限に抑え、また潮によるオーバーセールなどないコース取りをしていたと思う。また、潮流対応がまず最初に來てしまう海面だったが、周期の長いシフト、細かい風の振れはやはりあり、セオリー通りにタックを打ちつつ、潮でもロスしないタックを打てる、基本技術の高い選手がやはり上位だったと思う。
日本選手が劣っていること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海況に合わせて、良い位置、トップスピードでスタートする技術。</li> <li>・普段の練習水域と違う海況でのセーリング技術(例:波のある海面でのランニングなど)。</li> <li>・語学力(やはりコミュニケーションが取れないのは、審問はもちろん、交流の面からも残念)</li> </ul>
日本選手が勝っていること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・女子選手はスピードではある程度互角に戦っていた。</li> <li>・明るい気持ち(英語でのコミュニケーションがとれないため積極性に欠けるように見えがちだが、実は気持ちの強さなどは変わらないとも思えた)</li> </ul>
日本チームとしての課題	・機装や海上練習、陸上での過ごし方など、誰から指示されなくても自分で考えて判断し、行動する訓練が日常的にできていないと対応できない課題が、初めての海面、慣れない外国でのレガッタ、タイトな日程から来る準備不足の中では多くある。国際レガッタで自分の力を100%発揮するためにも、普段のクラブでの練習から、親やコーチは手を出しすぎない、選手達に自分で考えさせる訓練をする必要があると感じた。
JODAへの要望	・親コーチではなく、op経験者あり、国際レガッタ経験者もある若いコーチの育成支援。欧州各国のコーチは親ではなかったと思う。
その他	JODAの皆さまのサポートがあり無事遠征を終えることができました。ありがとうございました。

ご協力ありがとうございました

JODA 海外派遣委員会







